

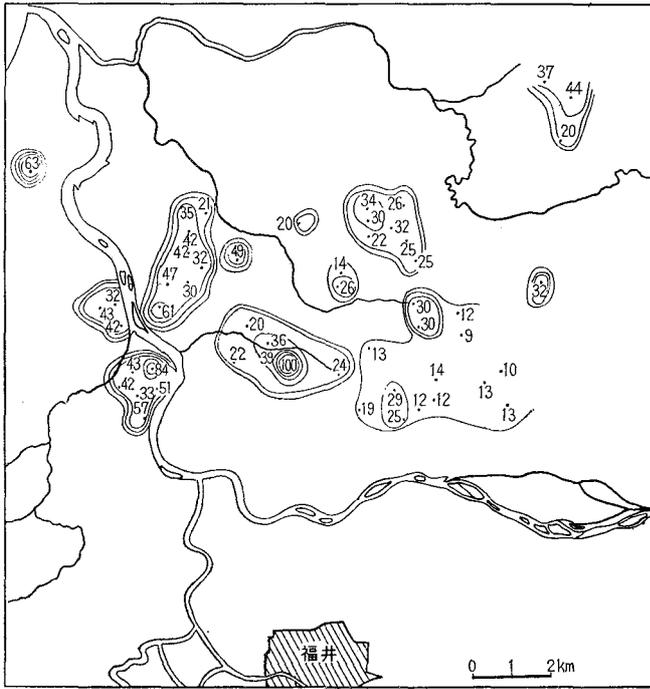
近世における越前黒目村の人口動態

浅沼操

はじめに

一般的にいえば、幕藩制時代には、農民の離村は嚴重に禁止されていた。これは、従前の耕地ならびに生産を確保し、貢租関係を安定し、封建体制を維持するためであつたことは周知のとおりである。農村の安定政策は実はこの目的のため労働力を確保するためのものであつた。したがつて農民の農村への緊縛は決して一律に強制されたものではなくて、貧農子女の出奉公は、むしろ奨励されたような事情もあることは、よく知られている。しかしながら基本政策として離村禁止の方向がとられていたこともあり農民の離村には五人組や村名主、旦那寺等々の届出、許可を必要とするなど相当厄介な手続を経なければならなかつた。このような事情で、反面、奉公出人は一つの既得権となり、奉公免という形で、特権的存在となる事情でもあつた。

何れにしても、流通経済の侵入と、それにとりまう都市への人口流動は、既に近世初期から見られたが、それは単に時代的現象であるばかりではなく、都市と農村との距離の問題や、農村の生産機構などの問題が相当複雑に関連



第1図 石高100石当り人口（嘉永2年）

し、地域的特徴としてとらえられ、歴史地理的な興味ある問題となる。

越前黒目村の人口移動の形態は、従来報告されている各種の移動形態のなかで可成特殊な問題を含むと考え、問題提起の意味をもって、現在の調査結果を報告し、先学諸氏のご叱正を乞う次第である。

この研究の資料は、佐久高士の「越前国宗門人別御改帳」によるところが大きいことを、おことわりしておく。

この研究にあたり、東京教育大学の浅香幸雄教授ならびに日本女子大学の佐藤甚次郎教授からご指導をいただくことができたのは、筆者の光栄とするところであり、深く感謝するものである。

一、人口分布より見たる福井平野

本稿の主題は、黒目村に関するものであるが、広く福井平野の人口分布のなかで、黒目村の人口が、どのような位置づけをされるかを見

る必要があると考える。

福井平野の人口分布の概要については、さきに拙稿^⑥でふれるところがあったが、戸当人口は全国平均より多少下回り、二、三の例外的村落を除いて、一般的には四五乃至三二程度である。更に村高百石当りの人口密度を見ると、第1図のように、平野の中心部および丹生山地の山脚部は四五内外を示し、全国平均に近似しているが、平野の東部では三〇内外、扇状地では、一四乃至一〇を示し、理解し難いような低さを示している。この低さは、この平野が低湿な水害頻発地域であり、重税地域であって人口支持力が、甚だ低いことを示すものである。このなかにあって、黒目村は、六三を示し、平野において例外的な高い人口支持力をもっている二三の村の一つである。

これは如何なる地理的理由によるものであるか興味をひく。

二、黒目村の人口増加

越前黒目村は三里浜砂丘の内側にある村高四〇六石一斗一升の村であって、福井平野としては中級の農村であつて、少くとも幕末七〇年間には村高の変化は全くない。この間戸数は、六〇戸乃至六五戸、人口は二五〇人乃至三〇〇人の間にあり、極めてわずかな変化を示すに過ぎない。概観的に見ると、極めて平凡な低位安定型の農村である。この村の人口の年次変化を示したのが第2図である。この図は、寛政一二年（一八〇〇）から明治二年（一八六九）までの、この村の人口増減改帳、宗門改帳から作製したものである^⑦。

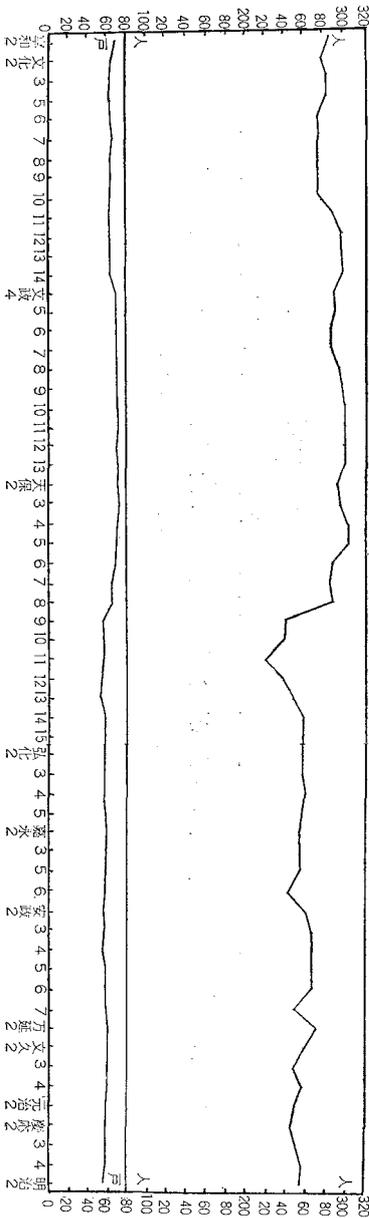
この図から次の諸項を読みとることができる。

(1) 黒目村の人口は総括的に見て、長い期間にわたつて、極めて増減幅が少なく、停滞、安定をつづけている。福井

平野の停滞性と極めてよく一致する。この限りにおいては、特に注目すべきものはない。

(ii) 文化年間には多少の増減はあっても、順調に増加している。しかしその増加はきわめてゆるやかで、最高三〇〇人をこえない。この村の最大可容人口を示すものと判断される。

(iii) 天保八年から九年にかけて、人口は急激に減少している。これは、全国的な規模の天保飢饉の黒目村における様相を示すものである。天保九年の死亡数は四七人で、全く突然に高く、絶家数七戸、他国願二三人に及んでいる。これは男ばかりである。この年には出生者もわずかに一名で、飢饉によるものであることは疑いはない。黒目村では天保六年にも二〇名の大量の死亡者をだしている。黒目村の南方にある長橋浦村では、天保五年（一八三四）に、風邪



第2図 黒目村の人口・戸数

が流行し、全村人口三五七人のうち三一六人が病気になる。実に八八・五%の人的損害をうけている。平野の中心部の田島村でも甚だしい死亡者をだしている。これらの事実を総合して、福井平野では、数年間にわたって、飢饉に見舞われ、大きな人的損害をだしていることがわかる。

(4) 天保一一年を最低として人口は恢復に向い、この年から明治初年までの三〇年間は、わずかではあっても、人口は増加しつづけている。但しついに天保前期には及ばなかった。

このように見てくると、概括的には黒目村の人口は、長い期間、停滞安定性をもっていたことが注目されるが、内容的な問題を見ると非常に特殊な動態をもっている点が注目される。

三、黒目村の人口動態

村落の人口動態を見るに当っては、出生、死亡、縁組、出入人口等について、全体的に見なければならぬが、前者については、著しい特徴は見当らないし、本稿では、村外への移動並びに村外からの流入人口を主題としているので、自然増および縁組関係は一応除外することとする。

黒目村の総人口は、極めて微弱の増減を示すに過ぎないが、内部的には、大きな動きを示している。福井平野の他の村落の動きと比較して、特殊な形となり、黒目村を特徴づけていることが注目される。

(1) 第3図は、この村から他村への出奉公人の行先を示したものである。天保飢饉のときの他国願の者は例外的であり、行先も明らかでないもので、図にはあらわしていない。出奉公人は、周辺の村々にでているが、村を中心に半径四キロメートル以内にとどまっていることが明らかである。それ以上の距離にあるものは、相当の数ではあるが、全

離は大きいものと見られ、黒目村の移動の一つの特徴である。

出奉公人の人数別、村別の行先地を見たのが第1表である。これによって見ると、移動先は、三国港が圧倒的であることがわかる。表のなかの、新保、出村、滝谷、宿の各村は、大きく見て三国港と考えなければならないので、これらを合わせると、九〇%以上は、三国港に向っているのであって、移動の大きな特徴である。移動の男女別を注意すると、その殆んど全部は女子であることが注目される。第1表の数は、必ずしも毎年の流れを示すものではなく、ある年数の間続けて奉公をしている者も含まれている。これは届出の形式の関係である。

その内容の一部を示すと、

文政八年 人家増減御改帳 黒目村

前略

女老人 清左衛門 娘

此者三国折戸屋権兵衛方ニ奉公仕候

女老人 与兵衛 娘

此者三国米屋嘉右衛門方ニ同断

文政九年 人家増減御改帳 黒目村

女老人 清左衛門 娘

此者三国折戸屋権兵衛方ニ奉公仕候

女老人 弥五右衛門 娘

此者西野中村左兵衛方ニ奉公仕候

のように、清左衛門の娘は二年続けて三国に奉公しているのであるが、表の上では、毎年出ていったように数えてあ

ル以内の村々から入ってくるのは、出奉公人の場合と同じである。ただ多少距離が遠いもの、村が分散的であることを見ることができる。

その人数別、村別を示したのが第2表である。この表から入奉公人は、分散的であつて出奉公人のような集中は見られない。米納津村、下野村、沖布目村などに多少の集中が見られる程度である。総合計で見ると、出奉公人の数と殆んど同数であることが注目される。

又男女別からすると、男女殆んど同数である。

このことから、黒目村の人口移動の形は次のように理解することができる。

この村の人口移動は、資料のある限りにおいて、享和年代（一八〇〇）より始まっているが、これは、それより可成以前から始まっている現象ではないかと考えられる。出入口は三国港の繁栄に関係し、若い娘が三国港に奉公にでている。

この場合、黒目村は独占していて、他の周辺の村々からは、三国港に対して奉公人をだしていない。明らかに特殊な形態である。

入奉公人は附近の村落から分散的に入り、出奉公人と略同数であるが、男女同数である。

若い娘が村をでた数を男女の雇入れによって補っている有様が、はっきりして、この動きには興味深いものがある。このような人口の入替は、どのような事情によるものであるかを究明しなければならぬ。

これにさきだつて、福井平野の他の村落の移動について述べ、黒目村の人口移動と比較して、黒目村の特殊性を明らかにしておく必要がある。

四、福井平野の人口移動

黒目村以外の福井平野の村落の人口移動の資料は少なくないが、二三の例を示すにとどめる。

田島村の場合 田島村は、国鉄北陸本線丸岡駅の東側に当る。幕藩時代には村高七八九石、戸数六〇戸内外で、ほぼ黒目村と同様規模の農村である。文政六年（一八二三）のこの村への入奉公人は女二名、一人は南四キロメートルの儀間村より、他の一人は南一キロメートルの一本田中村よりきてゐる。男の入奉公はない。この年に出奉公人は一名をかぞえるが、そのうち一〇名は道路をへだてた隣村の宮領村にいつてゐる。これは村内移動と見てよい程度である。他の一名は、北一キロメートルの長畝村にでてゐる。人数や移動距離から見ても、黒目村と比較して全く小規模である。この村には連続資料があるが、この傾向は長い期間続いている。

折戸村の場合 この村は現在は坂井町に属しているが、九頭竜川下流の北岸に位置し、幕藩期には、村高九二六石余、戸数八七戸内外、人口二七〇人、黒目村より少し大きい農村である。文政一三年（一八三〇）のこの村の出奉公人は女子一名で、吉田村に行つてゐる。他村よりの入奉公人は男子一名で、米納津村からきてゐる。その他の移動として、男子三五人、女子一人一名があるが、これらは、すべて村内の移動である。黒目村では村内の奉公人は七〇年間にわずか一名だけであるので、その状況は全くちがつてゐる。

高塚村の場合 この村は、金津町の北に接し、加越丘陵内の農村である。幕藩時代は村高五六七石余、戸数三六、人口は一一人で黒目村に比較して、その半数程度の農村である。文政二年（一八一九）の出奉公人は二名で、男一名が隣村の金津町え、女子一名が東南の隣村、菅野村に行つてゐる。他村からの入奉公は三名で、それぞれ、近接の

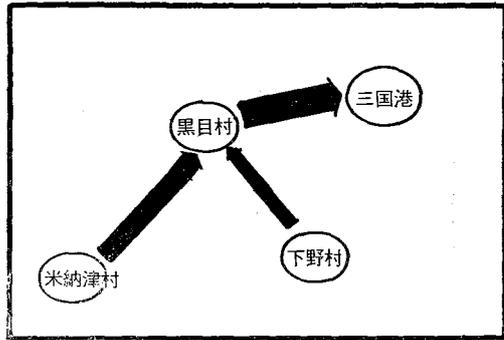
金津町、山室村、柿原村からきている。このほかに村内で一名の男子の奉公人があるが、これは全部地名子がその主家に奉公するもので、一般的な奉公とちがって、中世的な遺構を示すものとして興味があるが、ここでは、黒目村の人口移動と比較して、全くちがった形であることを指摘するに止める。

番田町の場合 この村は竹田川の北岸にあるが、幕藩時代には村高七一〇石余、戸数四七戸、人口二三人、黒目村とほぼ同じ程度の農村である。文化七年（一八一〇）の出入口は、男一名が三国港に行っている。黒目村以外の村から直接三国港にでている唯一つの例であって特殊な例である。入奉公人は総計四六人を数え可成の数にのぼっている。男子二人のうち八人は村内の移動であり、残る一三人は、山室村、清王村、上番村等の近隣の村々からきている。女子二五名のうち、福井からきている一人を除いては、村内か、上番村、国影村、重義村などの至近の村々からきている。黒目村と比較して、規模は小さい。

このように見てくると、福井平野では、各村でそれぞれ人口の移動が見られ、その事情は、各村各様であるが、黒目村とちがって、小規模であって、集中の傾向もないことが、明らかとなった。入替ということもない。

このように黒目村の人口移動は、平野の各村と比べて非常に特殊な形態であることは明らかであり、三国港に向けて独占的な移動を示し、周辺の他の村落からは、三国港への移動は例外として一例があるだけである。黒目村としては出人口と同数の人口を入れているが、これは村内の労働力の補充と考えられる。

このような人口移動を図式化すると、第5図のようになる。この図を見ると、伊豆大島の模式図と同様である。伊豆大島では、江戸への出稼移動のあとの労働力の不足を、神津島、三宅島からの移住者によって補なっている。この



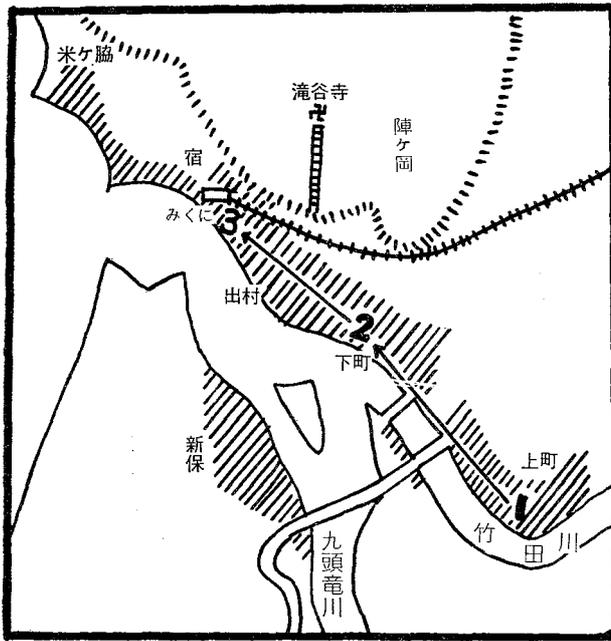
第5図 人口移動模式図

場合は、ラベンシュタインの法則が適用できるものと考えるが、黒目村の場合には、図式としては、大島の場合に似ているが、孤立的な環境でもなく、甚だしく近距離でもあるので内容的には全くちがって、幕藩体制のもとの特殊な事情を考慮しないと説明は困難であると考える。このような移動形態の形成は、しばしばふれたように、三国港の繁栄によることは、明らかな事実であるので、次にこの港の繁栄について検討する。

五、三国港の繁栄

九頭竜川の河口に近く、竹田川との合流地点に発達した三国港は、現在では、交通や経済事情の変化によって、老衰しているが、幕藩時代には、日本海岸のこの方面の唯一の海港として非常に繁栄した港である。

三国港が世人に注目されはじめたのは、遠く中世以前であるとされている^⑧。中世になって、この附近に荘園をもっていた春日神社や東大寺などでは、その貢納米のうち、三分の一乃至三分の二程度を現物で、奈良に輸送させていたことが明らかになっている。当時、福井平野の産米は九頭竜川の水運を利用して三国港に集められ、大船に積換えられた、この港に問丸が設けられたのは、中世初期であることも知られている。このように中世初期に既に賑わいを見せたのであるが、その規模は藩政時代に比べて小さかったようである。九頭竜川の河運を中心とした関係で、舟は小型で、この港の発展の核となった最初のものは、竹田川の川口、現在の三国港としては、最も奥の位置であった。



吉田 森、福井県新誌による

第6図 三国港の中心の移動

福井平野の物資の輸送路としての九頭竜川の重要性に注目した福井藩では、三国港の発展に対し特別な保護を加えている。
加賀藩でも、藩の南部大聖寺方面の物資の輸送に、この港を利用せざるを得なかった関係から、特別の保護を加えている。

藩政時代を通じて日本海海運の発展にとともに、船舶の大型化、港湾規模の拡大の必要から、港の中心は次第に第6図1より3の方向に移動した。

丸岡藩領の滝谷出村と三国港は、地理学的には一つの港市を形成するが、この水面の利用に関し、福井、丸岡の両藩は永い期間にわたって紛争を起している。これは三国港の発展にもなう中心の移動に関連したものである。

このような関係で、福井藩の米倉庫は、竹田川にそって1にあり、丸岡藩のものは3にあった。

これとは別に、滝谷寺の門前町も一つの中心

として栄えていた。このようなわけで、藩政時代の大三国港は、多中心の港市として繁昌したのである^⑧。

日本海海運の発展と、三国港の繁栄とは密接な関係がある。幕政初期には既に越前船或は越前資本は、日本海沿岸で大きな活躍をしている。慶長三年（一五九八）の記録によると、秋田藩の木材輸送に当った廻漕人のなかには、三国の治兵衛、利右衛門、新保の新助等の名が見え、三国勢の活躍が推測される。

このような活躍は秋田藩の例だけではない。下北半島の木材は南部藩の財源として重要なものであり、これらの木材は田名部を中心として日本海を通過して敦賀に輸送された。この輸送に当って、新保の久五郎は藩の特権的御用商人となつて活躍したことも明らかとなっている。

三国港、新保、滝谷出村、宿村等は相接統していて大三国港として考えてよいのであるが、ここを根拠とする越前商人は、舟持の廻漕業者としてだけではなしに、これに関連する資本家としても大きな活躍をしている。彼等が取扱つた運上金だけでも、六〇〇〇両、九〇〇〇両の多きにのぼつたことも一再ではなかつた^⑨。

このようにして、越前船は、津軽、南部、秋田各藩の米や木材を積んで、日本海海運に活躍したが、三国港は、その根拠地として繁栄したのである。その実状について二三の著名なものをあげると次のようである。

寛文八年（一六六八）の幕府の尋問に対する返答書によれば、その概況は^⑩。

- 一、米穀は他国へ出し申候
- 一、蠟、漆、油木実、他国へ出し申候様により領内不足の節は留申候
- 一、塩、他国へ出不申候、他国よりは入申候
- 一、大豆、年々領内不足ニ而、他国え出不申候、他国よりは入申候

一、鮭、鱒、鱈、領内払底の節は他国へ出申候、他国よりは入申候

右は松平越前守領内、米、雑穀、雑色、津留出入の様子、如此御座候、糸、綿布以外の者別儀無御座候者也極めて概要だけであり、数量等も不明ではあるが、福井平野への物資出入の有様をうかがうことはできる。

更に下って、享保一〇年（一七二五）の御巡検控には、港の繁栄が一層具体的に見えている^⑧。

当時の新保その他の接続地域を含めた大三国港の状況は、

北国船 三九 川船 三二 橋舟七
小船 五四 羽ヶ瀬船一 小廻一
馬 一一匹

となっている。馬は荷役用のものであろうが、九頭竜川の河船と北国船が注目され、この港の機能をよくあらわしている。市内の繁栄振りについては、

酒屋 一七軒、両替屋 二軒、質屋 八軒、鍛冶屋 三〇軒、桶屋 一五〇軒、豆腐屋 六軒、網役 一四軒、絹屋、室屋、轆轤役その他 傾城 六二人（三国） 八五人（出村）

となっている。料理、飲食業、米屋等当然なければならない業種が書き上げられていないし、桶屋の一五〇軒というのは、如何なる理由であるか不明であるといった各種の問題を別として、傾城合計一四七人というのは、港町の特色をよくあらわしているといえるべきである。

当時の近接村落を合せた大三国港は、各種の資料を総合すると、戸数二一七〇戸、人口は一〇八五〇人と推定される。これは城下町としての福井に次ぐものと考えられるから、その繁昌振りが推測できる。

このような繁昌のなかで、若い娘の職場は、広がったことは、容易に理解できるのであるが、近代的立場から見ると

と、それは、黒目村に限定される理由はない。ここに封建社会における特殊な条件を考えなければならぬ理由がある。

六、黒目村の発展と人口移動との関係

農村としての黒目村は、村高四〇六石一斗一升で、福井平野としては、中位の農村である。資料のある限りでは、幕藩期を通じて村高は変化していない。

この村は三里浜砂丘上に立地しているが、生産の本拠である耕地は前面の低地にある。この低地は瀉湖の開拓による湿田であつて、海抜僅かに一メートル、福井平野では最も低湿である。この地域は、平時には、石盛一六を示し優秀な生産力をもっている。しかしながら、常習的な水害地で、実収量は甚だ低い。水害による被害高は、福井平野のなかで最大を示していることは、この地域の免によつて推定することができる。

福井藩では、検見によつて毎年の税率をきめているが、黒目村の税率は福井平野のなかで最も低い。一例を示せば

文政元年（二八一八）

酉年（文化一〇年） 三分七厘余

戌年（文化一一年） 五分七厘余

亥年（文化一二年） 五分七厘余

子年（文化一三年） 貳分余

丑年（文化一四年） 五分八厘余

寅年（文政元年）

七分 下行半九俵被下置候

となつてゐる。特に財政窮乏の福井藩としては全く考えられない程の低い免である。この連続の低い免は、連年の水害によるものであることを示している。連年九〇%以上の被害であることを示し、特に文化一三年の如きは収穫皆無と見てよい程である。

農村という立場から見れば、これでは生活は全く困難であることが明らかである。この村が福井平野の他の村落と同様に割替制度を実施し、それが藩政時代を通じて継続された理由は、全くこの甚だしい水害の結果であることは疑う余地はない。

黒目村では、五八石四斗五升一合四夕の村総分の耕地をもつてゐる。これは、この村落の土地観念が、総有感念にあることを示すもので、恐らく純農村時代には、平等分割による割替制度が実施され、その割り残りが村総分として保有されているものと解釈される。尤も五八石というのは、余りに高が多いので、このなかには潰れ、或は逃散百姓の耕地が入つてゐるのかもしれない。いずれにしても水害地なるが故に、純農村としての黒目村は、非常な貧困に追い込まれたものと推定するに十分である。

藩政時代には、一般的には農民の離村は禁止されていたが、これは一律ではなくて、貧困な農村過剰人口の出奉公は共同体としての農村維持の上から好ましい方策として、むしろ歓迎されたのである。この場合も相当面倒な手続によつて、五人組や名主の許可を必要としたのは勿論であつた。したがつて、それが一つの慣行から次第に特権的存在となつたものと考えられる。

このようにして自然的に形成された特権は他の村落からの侵入を許さない程度に固定されたものと考えてよい。勿論この特権の持続には、黒目村より三国港のほうに、生活条件がよかつたことも重要な要件となつたことは否めない

であらう。

このような貧困のなかでは、戸当人口四・五、百石当り密度六三というような高い人口支持力は全く考え及ばないところである。当時既に都市化が相当に進んでいたことを物語るものである。

黒目村は三国港と至近距離にあり、港の影響をうけて次第に在町化の進行が考えられる。黒目村の都市化は雑家の比率の高度化によって示される。雑家とは、農業以外の職業に従事する家を指すのであって、必ずしも水呑階級の農民だけを指すものではないが、高を持たないで、農業に従事しない者は完全な雑家であって、高持の半農商人とはちがった意味をもつものである。雑家の内容は、大工、木挽、髪結、小商売、日雇等である。

福井平野における雑家分布の比率を見ると、平野の中心部の辻村、堀越村、清水村などの地域では全く雑家がなく純農村地域であることを示している。九頭竜川沿いの地域では、各村落ともに三〇%から四〇%台を示している。九頭竜川の水運に関連して都市化が進んでいることを物語るものである。

黒目村ではその時期に五〇%を示しているが、九頭竜川の河港小尉村とともに平野では最高を示し、都市化が非常に進んでいることをあらわしている。これは幕末の資料によるものであるが、実は黒目村の雑家率の高いことは、少くとも一八〇〇年代には、はっきり認められる。

更に明治初期には具体的な資料がある。明治五年の戸籍改めと、慶応二年の宗門帳とを比定すると、黒目村の商業化の内容を明らかにすることができる。

第3表を見ると、多少の例外はあるが、高持と高不持との別なく、殆んどすべての者が商業に従事していることは明らかである。

第3表

氏名(慶応2年)	氏名(明治5年)	旧持高	新職業
橋本 茂兵衛	橋本 茂兵衛	85石5斗8升9合	農
与三右衛門	中与三右衛門	38 6 5 3	農
八郎右衛門	坊野八郎平	35 2 8 5	農
喜平兵衛	川端喜兵衛	45 2 7	農
甚兵衛	坂井甚兵衛	40 6 1 1	農
弥三衛門	月岡弥三衛門	16 6 4 4	農
忠左衛門	広瀬忠左衛門	11 9 8 4	農
祐郎兵衛	橋布次郎兵衛	12 3 1 1	農
五弥三兵衛	小沢五弥三兵衛	13 3 1 5	農
善右衛門	小沢善右衛門	9 9 8 6	農
勘左衛門	塩谷勘左衛門	3 3 2 9	農
才兵衛	西岸才兵衛	3 3 2 9	農
四郎兵衛	苺谷四郎兵衛	6 6 5 8	農
与輪兵衛	伊藤与輪兵衛	15 5 5 2	表示なし
甚右衛門	藤森甚右衛門	9 9 8 6	商
喜右衛門	小西喜右衛門	9 9 8 6	商
弥右衛門	月岡弥右衛門	6 6 5 8	商
弥三治門	北川弥三治門	3 3 2 9	商
安右衛門	北川安右衛門	4 9 9 3	商
与三左衛門	川端安右衛門	6 6 5 8	商
清右衛門	？	6 6 5 8	？
左衛門	浜山谷形	3 3 2 9	表示なし
曾兵衛	山本曾兵衛	3 3 2 9	商
七郎兵衛	山本？	3 3 2 9	商
伝兵衛	北川伝兵衛	6 6 5 8	？
金左衛門	田中金左衛門	水 水 吞 吞	表示なし
五兵衛	田崎五兵衛	水 水 吞 吞	表
太右衛門	田小沢太右衛門	水 水 吞 吞	示
利兵衛	玉木利兵衛	水 水 吞 吞	商
弥五平門	白布弥五平門	水 水 吞 吞	商
三左衛門	山玉三左衛門	水 水 吞 吞	商
平助衛門	山玉平助衛門	水 水 吞 吞	業
利兵衛	山玉利兵衛	水 水 吞 吞	業
太左衛門	？	水 水 吞 吞	？
宇右衛門	？	水 水 吞 吞	？
弥左衛門	？	水 水 吞 吞	？

明治時代に入ると、社会変革にもなつて各種の封建的制約が取り除かれて、各般の社会情勢は急激に変わったが、農業から商業への転換というような問題は、それほど急激に起り得るとは考えられないので、第3表の示すとこるは、相当以前から、黒目村は商業化が行なわれていたと考えるのが素直であると思われる。

この資料から商業の内容を知ることができないが、高持の百姓が商業に従事していることは注目しなければならぬ。この表を注意すると、三石三斗二升九合の倍数の高になっていることがわかる。これは割替地域において、階層分化が進行して、実際上の耕地分割の基準がこのようなようになっていたことを示すものと考えられ、新潟平野の「ヤハン」と共通する性質を持つと考える。即ち黒目村では、商業化は進行したが、明治当初まで、農村から完全に離れてしまつたのではなくて、半農半商の形態が続けられたものと判断される。

商業化の進行が近代的な意味で行なわれたとしたら、黒目村の戸数や人口の規模は農業生産の制約を離れて、更に拡大の方向をたどつた筈である。しかしながら現実には、村落規模は一定限度に圧えられ、旧来からの出入口と、その空洞を埋める程度の入人口という関係が持続された原因は、農村を基礎とする村落構造が嚴重に守らされた封建体制の制約を考えなければならぬ。

一般に幕藩体制の下では、農村はもとより、都市においても停滞性が目立ち、それは幕藩の基本的な政策によるものとされているが、黒目村に関する限りでは、幕藩体制の制約の上になつてではあるが、半農半商的發展であり、しかも農業に相当な重点がおかれてきた関係があることを注目しておく。

七、結尾

幕藩時代の黒目村の人口移動は、福井平野において極めて顕著な事象であるが、これまで述べたところを要約すると、次の各項にまとめることができる。

一、黒目村の人口の増減の有様は、停滞的であり、福井平野の他の村落に比べて、特に目立った特徴は認められない。

二、戸当人口密度は、平野の他の村落に比較して多少高い程度で、特別注目する程のことはないが、村高一〇〇石当りの人口密度は甚だ高く、この村が平凡な農村ではないことが注目される。

三、内部的に見ると、多くの若い娘が近接する三国港に奉公にでているが、そのあとに近隣の村落から男女の奉公人を雇入れていて、これは労働力の移入である。その人数は総計すると、出奉公人と同数である。したがって黒目村の出奉公人は、過剰労働力の放出とはいえない面がある。

四、この出奉公は三国港の繁栄と密接に結びついているが、三国港への出奉公は黒目村の独占するところである。黒目村への入奉公人には、それほど顕著な独占傾向は認められない。

五、この移動図式を見ると、地理学的な一般法則が適用されるように思われるが、近距離移動であり、閉鎖的環境でもないで、この法則は適用されないで、特殊な形態と見なければならぬ。

六、黒目村の農村としての条件は甚だきびしく、割替制度の実施を必要とする程の水害地であるために、純農村時代には過剰人口の村外移動を必要としたものと推論される。

七、この農村時代の移動に当っては、封建制社会であったので、厄介な許可を必要とし、次第に固定化し、権利化し、独占の方向をとったことを推定することができた。

八、その後黒目村は次第に在町化の方向をとり、商業化が進むにつれて、労働力を必要とし、出奉公人と同数の人員を雇入れることとなったが、その半数は男子をもってあてた。

九、このような村内の労働力不足にもかかわらず、三国港への女子の出奉公が続いたのは、三国港での生活条件の良好ということも想像されるが、封建体制下の独占権の重視が大きな条件である。

一〇、黒目村の在町化にあたっては、農村基盤の範囲内での規模に押えられたので、一定の戸数人口で停滞したが、明治初期には、殆んど全村が商業化するまでに発展した。この発展のなかで黒目村の人口移動が説明できる。地理学的事象は、自然的背景は勿論であるが、社会的、時代的背景のもとに成立することを示す一つの事例である。

参 考 文 献

- ① 浅沼 操 福井平野における土地割替慣行についての地理学的考察 新地理一六の二
- ② 佐久高土 越前国宗門、人別御改帳 吉川弘文館 昭和四二
- ③ 豊田 武 中世日本商業史の研究 岩波書店 昭和二七
- ④ 福井県史
- ⑤ 岩田孝三 境界政治地理学 帝国書院 昭和二七
- ⑥ 吉田 森 福井県新誌(郷土新書18) 日本書院 昭和二七
- ⑦ 渡辺信夫 幕藩制確立期の商品流通 柏書房 昭和四二
- ⑧ 国事叢書 福井県図書館
- ⑨ 福井県史
- ⑩ 関山直太郎 近世日本の人口構造 吉川弘文館 昭和四三